Column

コラム

「永遠のあと百年」

「パラカのビジョンは何ですか」。これほど答えに困る質問はありません。この質問に対して今までは、前後の文脈から、相手がどれくらい先の未来予想図を聞きたがっているのかを自分ながらに想像して、そのつど内容を変えて答えていました。が今は、統一して「永遠にあと百年存続発展し得る会社にしたい」と答えています。

コーポレート・ガバナンス、コンプライアンス、CSR、リスクマネジメント、内部統制など、1980年代後半から、グローバル化、金融革命、IT革命などを背景にして企業の在り方についての様々な言葉が使われるようになりましたが、これらの言葉の受けとめかたは企業によって様々です。

当社は、「永遠のあと百年」を可能にする企業体質や風土・文化を確立するためには、これらの言葉のそもそもの趣旨や目的を明らかにし、一企業としてどのように位置付けるかが大切だと考えました。

当社では、これらの言葉が表す共通の目的は、「企業の持続可能性(sustainability)の向上」であると捉えています。

まず、ガバナンス(統治)とマネジメント(管理)の関係ですが、一番範囲の広い概念をコーポレート・ガバナンス、マネジメントはそれよりも狭い範囲の概念と考えています。ガバナンスの語源は「船の舵」を意味し、大きなものの方向性を決めるというニュアンスがあります。ガバメントは政治や政府と訳されますが、国家の舵をとる機関からきているように、ガバナンスは、シェアホルダー(株主)と会社、会社とステークホルダー(顧客、社員、取引先、地域社会などの利害関係者)の関係など会社を取り巻くすべてを対象とするのに対し、マネジメントの語源はラテン語でmanusであり、手の届く範囲をコントロールするという意味です。例えば、馬の手綱さばきのように、比較的小さく限定されたことを対象とすると理解しています。

次に、CSR(企業の社会的責任)とコンプライアンスの関係ですが、当社では、何に焦点を当てているかの違いはあるものの、ほぼ同義であり、二つの焦点を持つ楕円として捉えています。CSRのResponsibilityはresponseつまり「応答」することであり、Complianceのcomplyは(要求、命令、規則に)「従う」「応じる」ことです。complyをさらに語源にさかのぼると、com=完全に、ply=満たす、ことであり、例えば、お客様に提供する商品やサービスに万全を期す、あるいは地域社会や環境にまで配慮する姿勢となり、両者は非常に近づいてきます。CSRは、「経済的責任」「(狭義の)社会的責任」「環境的責任」のいわゆるトリプルボトムラインが一般的ですが、当社はこれに「法的責任」も加え、さらに両者を近づけた立場に立っています。

両者に完成はなく、当社ではいくつかのキーワードによって両者の理解を常に深めたいと思っています。たとえば、「主観的か客観的か」「多様性が大きいか小さいか」「能動的か受動的か」「戦略的か計画的か」「統合作業か分解作業か」「価値観拠りか倫理観拠りか」などです。どちらかといえば前者がCSR寄りで後者がコンプライアンス寄りという見方をしています。そして、両者は、二律背反の関係ではなく、相補関係にある。つまり共通の目的に向けて、互いの欠けた部分を補いあうべきものと受けとめています。

環境問題に取り組みたいというのは企業の主体性や能動性により、どのように取り組むかはそれぞれの企業の価値観や業種などの多様性などCSRの色合いの強いところから出発しますが、環境報告書までくると客観性を求めるものとなります。逆に、多様性が少なく受動性が高いと思われる法令遵守から出発しても、社会的な倫理、企業の価値観である企業理念にいきつくように一体のものとしての捉えかたです。

内部統制は「企業の持続可能性の向上」のための回帰的なプロセスを機能させる仕組みであり、2006年の会社法の改正により導入された内部統制=J−SOXとは、従来からあった内部統制を法的に整備したものです。押し付けられたものではなく主体的・自律的に、COM(完全に)PLY(満たす)を目指し、常にこれでよしとせず、「永遠の未完成、これ完成なり(宮沢賢治)」の精神にのっとり、努力してまいりたいと存じます。

参考文献　「会社はこれからどうなるのか」岩井克人(平凡社ライブラリー)/「コンプライアンスの考え方」浜辺陽一郎(中公新書)
「豊潤なる企業 内部統制の真実」鳥飼重和(清文社)